宮城県中学校長会
会報

平成29年度前期の活動を振り返って

宮城県中学校長会
会長　桂島　晃

師走を迎え，校長先生方におかれましては，学校評価や次年度に向けての経営構想，進路指導に係る会議等で忙しい日々を送られていると推察いたします。

宮城県中学校長会の前期の活動を振り返りますと，６月の総会では，東日本大震災からの復興・再生に向け，教育の充実・発展を活動の第一の柱とし，力強く宮城の中学校教育を牽引していかなければならないという活動方針が確認されました。それを踏まえて，各地区及び各学校において，校長先生方のリーダーシップの下，新学習指導要領を見据えた特色ある教育活動が展開されており，着実な歩みが見られております。また，理事会においては，新しい高校入試制度についての県教育委員会との意見交換，人材育成のための指導主事学校訪問の在り方等の検討など，当面する教育課題にも取り組んでおります。

６月には岩手県花巻市を会場に，第67回東北地区中学校長会研究協議会が開催され，教育の今日的な課題についての研究協議や意見交換が行われました。本県代表の本吉地区校長会には，宮城県独自の教育「志教育」の充実を図る学校経営について研究発表をしていただきました。地区内の各校の課題を整理して５つの改善ポイントを設定し，各校共通の観点で指導計画等，志教育の在り方を見直したことはより充実した学習を展開させる上で有効であり高い評価を受けております。

10月には大崎市岩出山スコーレハウスを会場に，第35回宮城県中学校長会研究協議会が開催され，「確かな学力の定着と向上」，「キャリア教育の充実（社会的･職業的自立）」,「志教育の充実」等，学校経営に係る喫緊の課題について，栗原地区，登米地区，本吉地区の三地区から研究発表していただき，積極的な研究協議により研修を深めることができました。主管された大崎地区校長会の皆様の熱意とおもてなしの心に支えられ成功裡に終えることができました。

10月19日，20日に，東京国際フォーラムを会場に，中学校教育70年記念全日本中学校長会東京大会が開催され，本県から43名，仙台市から17名，総勢60名の校長先生方が参加し，全国の校長先生方との意見交換や情報交換が行われました。19日の記念式典には，皇太子同妃両殿下にご台臨を賜りました。式典後に，急遽，東日本大震災の被災３県（岩手県，宮城県，福島県）の中学校長会長が別室に召集され，皇太子様から励ましの辞をいただくことになりました。御接見ということでしたが，両殿下と向かい合わせでソファーに座り約10分間にわたり各県の復興の状況等についてお話をさせていただきました。にこやかな笑顔で妃殿下にも質問されるなど貴重な時間を過ごさせていただきました。皇太子同妃両殿下が被災３県に対して心を寄せられ毎年被災地訪問をなされていることに深謝するとともに，全国の多くの皆様が被災県の教育の復興に注目していることを再認識することができました。今後とも，県校長会が心を一つにして，一意専心，中学校教育の更なる充実・発展のために，力を尽くしていかなければならないと決意を新たにしたところです。

東日本大震災から６年と８ヶ月が経過しました。宮城県震災復興計画の再生期の最終年度を迎え，来年度からの発展期に向け，インフラ整備が充実してきています。しかし，昨年度までの宮城県学習状況調査結果から「震災のことを思い出し不安になることがある」と回答した児童生徒が１～２割程度いることが分かっており，引き続き子どもや教職員の心のケアに努めていかなければならないと考えております。このような中，校長先生方のたゆまぬ努力に支えられ，宮城の教育が着実に前進しておりますことは，会員各位のご尽力の賜物に他なりません。幕末期から昭和初期に活躍した後藤新平（奥州市水沢出身）の言葉に「財を遺すは下，仕事を遺すは中，人を遺すを上とする」というものがあります。宮城の復興を担う人材育成こそ本県の教育に携わる我々教師に課せられた使命と受けとめています。

今後とも，「実践もあり理論もある教育の実践的専門家集団」としての役割を果たし，次年度に繋がるような活動を推進してまいりますので，ご理解とご協力の程をよろしくお願いいたします。

第68回 全日本中学校長会研究協議会 東京大会

研究主題：「社会を生き抜く力を身に付け，未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」

中学校教育70年記念第68回全日本中学校長会研究協議会東京大会が10月18日～20日の３日間，東京国際フォーラムを会場に開催された。大会には，全国から約4000名の会員が参加し，研究主題「社会を生き抜く力を身に付け，未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」の三年次として新たな展望に立った中学校教育の在り方を求め，熱心な研究討議が展開された。

第１日　10月18日（水）

全日中常任理事会　全日中理事会
記念式典・研究大会実行委員会

第２日　10月19日（木）

【記念式典】

皇太子殿下，同妃殿下の御台臨を仰ぎ，中学校教育70年記念式典が挙行された。全日本中学校長会直田益明会長の式辞の後，林芳正文部科学大臣の挨拶，皇太子殿下のおことば，伊達忠一参議院議長の祝辞と続いた。その後，607名を代表して草野一紀全日本中学校長会元会長に感謝状が贈呈され，全日本中学校長会元副会長が感謝状受領者を代表して謝辞を述べた。

【伝統芸能】

新内節と八王子車人形の日本の伝統芸能の公演が行われた。人間国宝鶴賀若狭掾氏らによる洗練された聞く人の心に訴える新内節と特殊な一人遣いの人形芝居の共演であった。

【開会式】

直田益明大会会長が「今後，社会変化のスピードが一層加速し，変化を予測することが困難と言われる状況に中で，教育の在り方も転換が迫られています。私たち校長には，教育の専門家として課題を正しく把握し，その解決に向けて新しい時代にふさわしい学校教育を創造していくことが求められています。」と意義のある大会になるよう期待を込め挨拶した。

【全体協議会】

今大会は，分科会がなく全体協議会で２つの地区からの研究発表があった。

①「未来を切り拓くためのキャリア教育の視点に立った進路指導の充実」と題し，神成浩北海道浦河町立浦河第一中学校長から，ふるさとの教育資源を活用した進路指導についての発表があった。

②「時代の要請に応える学校経営の充実」と題し，野々村拓也鳴門教育大学付属中学校長から，学校評価を学校全体のモチベーションが上がるような実効性を高めるための取組についての発表があった。

第３日　10月20日（金）

【文部科学省説明】

白間竜一郎文部科学省大臣官房審議官から，①教育再生実行会議　②カリキュラム・マネジメント　③教員の働き方改革について　④新学習指導要領の円滑な実施と学校における働き方改革のための指導・運営体制の充実についてを中心に説明があった。

【記念講演】

ノーベル生理学・医学賞を受賞した理学博士日本学士院会員大村智氏の「私の半生を振り返って」という演題でご講演をいただいた。「子供時代に祖母から教えてもらった『人のためになることをやりなさい』という教えを大切にして研究を続けてきた」という研究に対する姿勢等，熱い思いが伝わってくる講演であった。

【閉会式】

大会会長と大会実行委員長の挨拶に続き，次期開催地である鳥取県代表の挨拶と紹介ＤＶＤが放映され，大会が終了した。

（岩沼市立岩沼中学校長　浅川　光喜）

第35回 宮城県中学校長会研究協議会 大 崎 大 会

第35回宮城県中学校長会研究協議会大崎大会が，「未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え社会において自律的に生きる日本人を育てる中学校教育」の大会主題の下，10月13日，大崎市岩出山文化会館（スコーレハウス）で開催されました。

開会行事は，半田宏史大会実行委員長の開会宣言の後，桂島晃宮城県中学校長会長が，「震災から６年７ヶ月が過ぎ，復興計画は来年度から発展期を迎えますが，依然として心のケアの必要な児童生徒が１～２割程度おり，引き続き心のケアに努めていかなければなりません。校長先生方のたゆまぬ努力に支えられ，宮城の教育が確実に前進していることに深く感謝申し上げます。」と挨拶しました。

次に記念講演では，佐々木悦子大会副実行委員長が講師紹介を行い，講師の鳴子ホテル女将髙橋弘美氏より，「凛　～時代（とき）とともに生きる～」と題してご講演をいただきました。女将さんからは，これまでのご経験されてきた中から，時代の変遷と共に，その時代に合わせた女将としての生き方，経営者としての生き方を見つめてきたことなどについて貴重なお話をいただきました。内容の一部を紹介したいと思います。

おもてなしは時代と共に変化する。今や時代は「十人十色」でなく「一人十色」。あのＴＤＬでさえクレームが発生している。実はクレームは顧客（学校なら保護者）をつかむチャンスである。対応の基本は「否定･非難しない」「価値判断しない」「傾聴と受容」であり，中立を守ること。着物の半襟のようなサービス（見えなくても見えすぎてもいけない)が大事である。「恐れ入りますが･･･」「お手数ですが・・・」「よろしければ・・・」などのクッション言葉も有効である。経営者は，四勝力（「因力」「作意力」「資糧力」「善友力」）と３つの意（「熱意」「誠意」「創意工夫」），そして「縁欠不生」（縁がなければ生きていけない），「少欲知足」（足るを知ることで良心が復活する）を意識することが大切である，とまとめられました。

閉会行事では，菊地正美大会副会長が，ご講演への御礼と，開催にあたり準備や運営に当たっていただいた大崎管内の校長先生方，大崎市教育委員会，関係各位への御礼を述べ，来年度は，第36回宮城県中学校長会研究協議会登米・栗原大会が登米市で開催されることを報告し閉式の挨拶としました。

研 究 題　「生涯にわたり学習する基礎を培う「確かな学力」の定着と向上」（栗原地区）

第１分科会に参加して

七ヶ宿町立七ヶ宿中学校長　加　藤　敏　充

1　はじめに

第１分科会では，研究題を受け，「確かな学力」の定着と向上を目指す学校経営～校長のリーダーシップの在り方を通して～を研究テーマに掲げて取り組んだ栗原地区中学校長会からの発表と研究協議が行われた。

2　研究発表

⑴　研究の方針

市内の８校が研究テーマを共有し，各校それぞれの実情に即して，校長のリーダーシップの下に取り組む３年間の実践研究とした。

⑵　研究の概要

１年次（平成27年度）

研究主題を設定し，各校で学力の定着と向上に向けた取組を行った。

そして，平成25年度から３年間，県の学力向上指定事業を受けて実践に取り組んできた若柳中学校と高清水中学校の２校の実践について成果を共有した。また，２校の事例から校長のリーダーシップと学校経営の取組として，「校内研究への適切な指導助言」，「教育の充実のための加配等の配置」，「学習指導要領改訂や教育の潮流を見据えた職員への啓発や指導」が大切であることも確認された。

２年次（平成28年度）

高知県教育委員会がまとめた「秋田県と福井県の学力を支えている主な取組」を参考にし，２県に共通した取組が，どれ位実施されているかについて調査した。また，各校の創意ある取組を自由記述により集約し，「確かな学力」の定着と向上に向けた取組や校長のリーダーシップについても調べた。

３年次（平成29年度）

教員経験年数の５年目以下の教員（35％）と21年目以上の教員（45％）が８割を占めることから，この層の教員の授業力向上が重要であると考え，経験年数の構成を踏まえ，各校ではどのような取組をしているのかを調査した。また，２年次のアンケート結果の再分析を行った。

⑶　研究の成果と課題

成果としては，「確かな学力」の定着と向上に向け，実施されている校長のリーダーシップを踏まえ，次の３つが重要であることが確認された。

①ビジョンや方針の明示

確固たる信念や教育観，学力向上に向けたビジョンや方策を明確に示すことで，共通理解が図られ，組織的な取組につながっていく。

②専門的力量や資質向上に係る指導・助言

校内研究への指導や助言は，内容の充実や教師の指導力の向上につながる。また，日常の授業参観と指導は，職員とのコミュニケーションの中で，個々の教師の理解と力量の向上，そしてビジョン・教育観の浸透につながっていく。

③体制整備や組織運営に係る取組

校内体制や研究推進委員会等の組織づくりや育成を考慮した教員の配置等は，５年目以下の教員育成の面で重要である。また，組織運営が円滑に進むことにより，取組の徹底につながっていく。

研究における課題としては，職員評価による目標管理の活用と，取組の徹底を目指した教頭・ミドルリーダーと連携の在り方と体制づくりがあげられた。

3　研究協議

５名程度のグループに分かれ，各校の取組の成果や課題について活発な意見交換がなされた。

4　おわりに

３年間の研究に取り組まれた栗原中学校長会の研究発表を拝聴できたこと，協議において，自身の実践に対して様々なアドバイスをいただけたことなど，非常に有意義な分科会であった。今後の学校経営に生かしていきたい。

研究題　「未来を切り拓くためのキャリア教育の視点に立った進路指導の充実」（登米地区）

第２分科会に参加して

大郷町立大郷中学校長　齋　藤　祐　一

1　はじめに

第２分科会では，登米地区校長会から「社会的・職業的自立のために必要な能力を育成する志教育の充実」～地区コーディネーターの活用を通して～と題して研究発表があり，質疑・応答や情報交換で研修を深めた。

2　話題提供の概要

⑴　研究の概要

①登米市の地区コーディネーターについて

登米市では各旧町教育事務所ごとに，地区コーディネーターを配置し，各校の志教育の推進を支援している。キャリアセミナー講師選定や運営等をはじめ，地区とのパイプ役として様々な学校支援活動に関わっている。

②校長としてのかかわり

校長会は，各校の地区コーディネーター活用状況や登米市パートナーシップ会議等で出されている登米市の地域や企業が求める人材・能力について共通理解を図り，自校の学校経営に反映させるとともに，市内の小･中･高全体で志教育について考えてきた。

⑵　研究の実践

①地域や企業が求める人材・能力の共通理解

登米市パートナーシップ会議等で出されている登米市の地域や企業が求める人材・能力について詳細をとりまとめ，小中校長会議で共通理解を図った。

②キャリアセミナーの準備と運営

市内全ての中学校で実施している。地区コーディネーターは，講師の選定・当日の運営補助に当たっている。講座の受講後，多くの生徒は社会的自立に向けて，学習意欲・コミュニケーション力・地道な学習の重要性について感じている。

③キャリアセミナー講師交流会

登米市教育委員会と地区コーディネーターが中心になって実施。キャリアセミナー講師，教職員，地区コーディネーターが参加し，ワールド・カフェ方式で意見交換を行った。

④キャリアセミナー事業説明会での校長会からの講師派遣

校長会から派遣された民間企業出身校長が，「キャリア教育に関する一考察」と題して社会の大きな変化，志教育の課題，社会で求められる能力，これからの志教育の方向性等についてプレゼンテーションを行った。社会経済を理解した上で何ができるかを考えること，学びと社会の仕事を結びつける視点の重要性などを再確認した。

⑤各学校での活用事例

地区コーディネーターを活用した３校の事例について紹介された。

・図書室の整理（新田中）
・登校時や引渡訓練での安全指導（南方中）
・地域の伝統芸能の指導（登米中）

⑶　成果と課題

成果については，地区コーディネーター活用のメリットについて３点報告された。また，各学校において，コーディネーター活用の機会が増加し，生徒や保護者にも浸透している状況も報告された。

課題については，支援内容の検討と校長の補佐的役割の２つの視点から報告があった。

3　おわりに

登米市では「学校･地域教育力向上対策事業」と「コミュニティ・スクール導入等推進事業」を２本柱として，地域とともにある学校づくりを推進している。地域と連携し，地域の人材を活用した登米市の取組は，たいへん興味深く参考になった。

参加の校長先生方からも，地区コーディネーター活用や地域と連携した取組の具体的な内容について等質問が出されるとともに，自校の実践等についても話が出され，理解を深めることができた。

研究題　「生きる力」を育成する教育課程の編成・実施・評価・改善（本吉地区）

第３分科会に参加して

石巻市立牡鹿中学校長　　増　子　光　昭

1　はじめに

主題「『志教育』の充実を図る学校経営」の基，本吉地区中学校長会の実践報告を受け，その後，報告に対する質疑応答や，各地区の実践例の紹介があった。志教育の充実を図る実践や課題について意見を交流し充実した分科会となった。

2　話題提供の概要

本吉地区では志教育の充実を図るため，①志教育のねらい　②生徒の実態　③震災復興の担い手　④家庭地域との連携の４視点から課題を設定した。さらに，本吉地区14校の実態調査により改善ポイントを絞り込み，下記の５つの提示を行った。

1　志教育の「意義」を確かめよう
2　志教育が「実感」できる指導をしよう
3　志教育の「校内推進体制」を整備しよう
4　志教育の「場面や教材等」を工夫しよう
5　志教育の「連携」を図ろう

この改善ポイントを基に本吉地区14校が志教育に取り組み，下記の実践の紹介があった。

〈実践例１〉防災学習では，「意義」「実感」「連携」の改善ポイントを踏まえ防災訓練を実施し，2回のアンケート調査から生徒の意識の高まりや指導の改善点が検証できた。

〈実践例２〉地域団体ＮＰＯとの連携では「場面や教材等」「連携」の改善ポイントを踏まえ，学校と地域ＮＰＯの連携により部活動支援及び生徒の地域活動への橋渡しになるなど，太いパイプづくりを行い，地域ぐるみで生徒の育成を行った。

〈実践例３〉海洋教育では，「意義」「実感」「校内推進体制」の改善ポイントを踏まえ，志教育の意義・目的を教員間で共通理解し教育課程を編成した。海洋体験学習の充実を図ることで生徒の進路探求への意欲につながった。

本吉地区校長会がリーダーシップをとり5つの改善ポイントを明確に提示することで学校間の連携が図られ，自校における志教育の取組の参考や改善につなげることができる提案があった。

3　各地区からの意見交流

本分科会に参加した学校の実践紹介及び課題や成果を話し合った。

①　学校・家庭・地域連携

• 学校と地域団体が教育活動を連携していくことは，生徒にとって地域の一員として志を育む効果的な手立てである。

• 連携については，校長として地域の特性を捉えながらコーディネーターとして推進していくことが大切である。

②　志教育の３視点の定着

• 志教育の３視点を教育課程に明確に位置付けることで持続性のある実践が図れる。

• 特に視点の「はたす」について生徒の変容を捉える必要性がある。地域の特性を押さえた実践的な活動を工夫し生徒の一人一人の学習活動からその姿を見取ることができる教育課程の編成を行う。

③　志教育推進の組織及び評価

• 教頭や主幹教諭，地域連携担当者を機能させ，保護者及び地域と課題を共有しながら取り組んでいくことが重要である。

• 自己有用感を高める指導と評価を通し，振り返りを重視した評価の声掛けを工夫することで生徒の活動意欲を向上させていく。

4　おわりに

志教育は，土を耕し，種をまき，成長を育み，やがて，大きな花や実をつけることに類似する。学校は地域の教育力を生かし，生徒一人一人が夢と志をもって未来を切り開いていくことのできる意欲と態度を育んでいく。提案された貴重な実践から更に改善を探る手立てを得ることができた。